

Title	日韓近代文学における父子関係の比較研究：島崎藤村と廉想渉を中心に
Author(s)	任, 苔均
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42210
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	任 菩 均
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 5 7 0 4 号
学位授与年月日	平成12年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	日韓近代文学における父子関係の比較研究 —島崎藤村と廉想渉を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 内藤 高 (副査) 教授 出原 隆俊 教授 柏木 隆雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は日本と韓国の近代文学に現れた父子関係の様相を、島崎藤村(1872-1943)と廉想渉(ヨム・サンソプ、1897-1963)を中心に比較考察したものである。島崎藤村から廉想渉(1912-1920、1926-1928に日本滞在)への影響関係は実証的にはまだ明らかになっていないが、その可能性も視野に入れながら、両作家の幾つかの作品を、特に「父子関係」というテーマを手掛かりに、対比研究を試みた論文である。全体は、序章終章を除き、二部構成をとっており、第一部は四章、第二部は二章さらに付章からなる。400字詰原稿用紙にして約600枚の論文である。

序章においてまず、〈父の不在〉と〈捨子意識〉、〈父殺し〉と父への回帰、大家族主義とそれへの反発、家の〈零落〉と〈墮落〉など論文全体を貫く基礎概念が提示された後、第一部「島崎藤村と廉想渉文学の比較研究」のそれぞれの章において具体的な作品の比較が試みられる。第1章「島崎藤村と廉想渉文学の関連様相」では、藤村や田山花袋の日本自然主義の廉想渉への影響の可能性が検討される。

第2章「『破戒』と『万歳前』」では、両作品が対比して分析され、通過儀礼としての旅を通して主人公が〈負〉の父性原理の支配する社会や家を発見し、自己のアイデンティティを自覚し異国の地を求めて出発するという共通のテーマが存在することが指摘される。

第3章「『春』と『標本室の青蛙』」では、〈狂気〉というモチーフを中心に両作品が分析され、この狂気の言説を齎すものとしての近代化の中にある家における〈父親の不在〉の意味が考察される。

第4章「『家』と『三代』」では、変動期における伝統家族の没落の様相が、世代の交代劇や父親の不在、そして自我の確立の観点から分析される。父の不在を通して、逆に主人公は父の実体を認識し、自己の主体的生活を確立しようとするのであるが、いずれも〈家〉という人間関係の拘束から逃れきれず苦悩する、こうした共通のテーマが明らかにされる。

続いて第二部「島崎藤村と廉想渉文学における父子関係の様相」では、それぞれの作家の個別研究の立場から、文学に現れる父子関係の分析が試みられている。まず第1章「島崎藤村文学における〈捨子〉意識」では、藤村文学の基調をなす〈捨子〉意識が特に『新生』の読解を通して解明されている。節子との関係のみから論じられやすい『新生』を、〈捨子〉意識から解放され〈嫡子〉意識へと向かう主人公の父子関係を重点にして捉え直した論である。

第2章「廉想渉文学における家父長制批判と父子関係の様相」では、廉想渉の初期小説から『三代』に至るまでに現れた、封建的大家族制度に対する意識が、〈個性〉から〈生活〉へという叙述の観点の変遷に従って考察されてい

る。父親の不在の問題が、個人的な家族のレベルに留まらず、社会や国家のレベルにまで解釈され、廉想渉文学における、真の〈父親探し〉の問題の重要性が強調されている。

付章「牧野信一「父親小説」群と廉想渉『三代』」では、両者に共通する父親像、父との関係の回復の問題が、前章までの藤村と廉想渉の比較を補完するような形で提示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで先行研究においては『家』と『三代』に限られてきた島崎藤村と廉想渉の比較研究を、対象となる作品を拡大し、また父子関係という明確な一貫したテーマから考察していった日韓比較文学研究の本格的な論文である。特に、『春』における青木と岸本の狂気の質的な差異と、「標本室の青蛙」における金昌億と〈私〉の狂気の差異とが作るパラレリズムを軸に、分析を展開していった第一部第3章、父の想起、再発見という観点から『新生』を読み直した第二部第1章など、論者独自の視点からの掘り下げられた読みが展開されており大変興味深いものとなっている。全体を通して論者は両作家の作品を非常に丁寧に読んでおり、堅実な分析によって十分な論を展開している。日本語の表現力も質的に高いレベルにあり、参考資料として提出された廉想渉の諸作品の日本語訳もそれ自体文学的テキストとして読める良訳であった。

とはいえ、本論文が幾つかの問題点を含んでいることも事実である。構成においては、第二部では第1章と第2章を関連づけまとめる章が必要であろう。内容のうえでは、〈捨子意識〉という概念がやや曖昧であること、第二部第2章に第一部の反復が多く十分な展開がなされていないこと、付章において、牧野信一の作品の捉え方が不十分なことなどがまず指摘できる。また廉想渉自身の紹介や韓国の自然主義文学がどのようなものであったかなどテキストの背景についてさらに十分な説明があれば、比較の意味が一層明確になったと思われる。

しかし、これらの諸問題は、本論文全体の価値を損なうものではなく、研究の深化によってさらに充実した成果に達するための課題として考えられるべきものである。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を付与するにふさわしい内容を有するものと認定する。